

明治時代の京都を訪れたイギリス人の工芸と 室内装飾に対する反応とその思想的背景に関する研究

野 口 祐 子

はじめに

京都は明治時代から欧米人旅行者にとって憧れの地であった。日本国内の政情が安定してからは、京都の観光名所や、おりからジャポニズムの影響もあって高い評価を受けていた美術工芸について、欧米の新聞・雑誌・旅行記などで頻繁に紹介されていた。そのため、前もってかなりの知識を仕入れてから京都を訪れる者が多かった。そういう旅行者の目に京都がどのように映ったか、彼らがどのような感想を抱き評価を下したかを考察することは、当時の京都の様態を知るよすがとなるだけでなく、訪れた欧米人の価値観についても学ぶための貴重な手がかりとなる。本報告では、特にイギリス人旅行者の京都に関する記述を取り上げ、彼らの京都体験での反応から彼らの美的趣味とその思想的背景を考察し、京都の建築・調度・工芸品に付与された意義を明らかにしたい。

1 イギリス人旅行者が見た京都の美術工芸

京都を訪れるイギリス人は明治時代の間に増加していったが、当初は外国人が自由に出入りできなかつたため、特別の許可を得た旅行者に限られていた。外交官やお雇い外国人、メディア関係者以外では、世界漫遊旅行を行う経済的に恵まれた知識人がほとんどであった。彼らの多くはイギリスの中でも優れた美意識を備え、日本文化への関心も高い人々であった。そのような旅行者が京都を訪れた際には現地でガイドを雇うことになり、彼らの案内で観光するので、訪れる名所、見学する工房、買い物をする店は大体同じ所になったようである。ここに取り上げるイギリス人旅行者の旅行記には、一様に京都の美術工芸への賞賛が記述されている。なかでも粟田焼が共通して登場するのだが、粟田焼については、時代が下るにつれて、欧米でのジャポニズムの流行に追従して本来の職人の美が失われていくことを嘆く声が増えるようになる。以下でそれぞれの旅行者の反応を考察していきたい。

(1) Marianne North の場合

1875年11月から12月にかけて日本を訪れた画家のMarianne North (1830-90)は、駆け足でのスケッチ旅行だったが、京都には約1ヶ月滞在したと推測される。ノースの『回想記』によれば、彼女が滞在時の京都在住ヨーロッパ人は彼女を含め6人だった。ノースはイギリス公使パークスの計らいで3ヶ月間「好きなだけスケッチできる」滞在許可を得た(221)。京都を拠点に盛んにスケッチのための小旅行をしたが、寒さのため体調を崩し、急遽香港へと向う羽目になった。特に京都の旅館のすきま風がこたえたと書いている。ノースの『回想記』には当時の日本に関する事実誤認が散見されるが、画家だけあって美と色彩に関する記述が多いのが特徴である。人力車に乗って琵琶湖へ行く道中で、三条通と思われる粟田焼の店が並ぶ通りについて、“going through a long street full of china-shops, where the modern cream-coloured porcelain was exhibited which is sold in Europe as Satsuma. The paintings of birds, insects, and flowers on it are exquisite, though it is extremely cheap.”(220)という記述がある。当時の主力輸出品のひとつであった粟田焼がヨーロッパでは「薩摩」という名で呼ばれていたのは、万国博覧会での評価が関係している。京薩摩の逸品を多く収集する清水三年坂美術館の「京薩摩」についての解説によれば、1867年のパリ万国博覧会に単独で参加した薩摩藩が薩摩焼を出品して高い評価を受けたので、1873年のウィーン万博に日本政府が初めて参加した時も大量に金彩色絵の薩摩焼を出品し、作品は飛ぶように売れた。その結果、京都を含む各地で薩摩風の焼物が輸出向けに大量生産されるに至ったが、「その後、日本は急速に工業化を押し進め、それにより工芸から工業への人材のシフト、人件費の高騰、意匠のマンネリ化などもあり、急速に衰退していったのであった」ということである。この薩摩焼は、同じく清水三年坂美術館の解説によれば「京都では、粟田焼として名高い三条粟田口周辺の窯元で、明治初期から大正期にかけて大量に生産され、京薩摩と呼ばれていた。本薩摩と比べて、より繊細で雅やかな作風で、たちまち欧米人達を虜にし、一時期生産量で本薩摩を凌ぐ程であったという」。

1875年の秋にノースが見たのは、この京薩摩であったろう。ノースの記述からは、1873年のウィーン万博を契機にヨーロッパ中でブームとなっていた品々を直に目にし、しかもそれらが驚くほど安価に売られていることへの興奮が感じられる。“Kioto was a terrible place for emptying purses. While Lady Parkes was there we had a perfect bazaar every night of wonderful embroideries, china, bronzes, and enamels, the latter being expensive but very lovely, with porcelain linings” (227)という記述からも、おそらくは商人が滞在先に出向いて商品を見せたのだろうが、彼女はパークス卿夫人と共に工芸品の数々を品定めして楽しんだ。それらの品には、欧米人の購入を意識して作られたものも多かったのではないかと推測される。

ここでリストの中の“enamels”に注目したい。高価だが美しい七宝(enamels)とは、ノースがその工房を見学したと書いていることと、その有線七宝の制作過程から判断して、並河靖之による七宝のことではないかと推測される。1873年から1905年まで日本に暮したBasil Hall Chamberlain(1850-1935)は百科事典的日本誌である*Things Japanese* (1898)の“Cloisonné”の

項で、“Mr. Namikawa, the great cloisonné-maker of Kyōto, will show visitors specimens that look antediluvian in roughness and simplicity, but date back no further than 1873”と記述している(90-91)。このくだりは、日本における七宝の技術が完成の域に達したのは最近であることを示すための例としてチェンバレンが挙げているものだが、彼の見立てでは並河の技術も当初は稚拙であった。チェンバレンが並河を訪問したのがいつのことかは筆者には把握できていないが、並河靖之七宝記念館によれば、並河が七宝を始めるのは1873年からであって、1875年の第4回京都博覧会に七宝花瓶を出品、有功銅賞を受賞したということなので、チェンバレンの記述と比較すると、作品の完成度が短期間で格段に上がっていることが推察できる。ノースが見学に行った1875年秋は、まだ欧米で有名になる前のことであつたと考えられるが、並河の七宝も1876年のフィラデルフィア万国博覧会での銅賞受賞をはじめとして、各地の万国博覧会で受賞し、欧米にその名が知られるようになった。並河の作品はその精密さのため制作に時間がかかり、また並河が完璧さを求めるため非常に高価で、欧米の美術館や富裕層が作品の主な購入者であった。栗田焼の窯元に近い現存の並河邸は1894年の竣工で、現在は記念館として公開されているが、当時欧米人の訪問を受け入れ、並河本人が応対して作品を見せたことが、他の欧米人による旅行記からも分かる。ノースが見学したのが並河の工房であるとすれば、七代目小川治兵衛による琵琶湖疎水の水を引いた作庭で有名な現存の並河邸になる以前から、欧米の旅行者の訪問を受け入れていたことになる。これは並河の外貨獲得への意志の現れでもあろう。

ノースの回想記から、いまだ欧米からの観光客が頻繁に訪れる都市ではなかった明治維新後間もない時代の京都が、安価な栗田焼、高級品の希少価値を帯びた有線七宝といった、欧米の人々をターゲットにした美術工芸品で殖産工業の道を歩んでいたことが分かる。そしてノースはイギリス人旅行者として素直にそれらに感動し、購買欲をかき立てられたのだった。

(2) Isabella Bird の場合

1878年、日本に7ヶ月間滞在して各地を旅したIsabella Bird (1831-1904)は、京都について“the beauty of the things in many of the small dingy shops is wonderful. Kiyōto is truly the home of art.”(Bird, Vol. 2, 247)と記している。ノースが文字情報よりも画家としての感性で日本を受け止めたのとは対照的に、詳細な旅行記の執筆を目的として来日したバードは日本に関する情報の収集に余念がなかった。バードが、日本の工芸品について語るのとははや新鮮味がないと述べるほどに(248)、イギリス人読者にとって日本は美術工芸の国として認識されていた。そのバードにとっても京都への旅の目的のひとつは美術工芸品の購入であった。すでに紹介しつくされているという京都の工芸品について、バードとて口をつぐむどころか、各所で感銘を受けたその美の特質を、具体的な描写で伝えようと試みている。

I see numbers of objects everywhere, and especially here [=Kiyōto], which give me great pleasure, and often more than pleasure. It is not alone the costly things which

connoisseurs buy, but household furnishings made for peasant use, which are often faultless in form, colour, and general effect. As on the altars and on the walls of Japanese houses you see a single lotus, iris, peony, or spray of wisteria; so on cups, vases, or lacquer made for Japanese use the effect of solitary decoration is understood, and repetition is avoided. (Vol. 2, 248) ([]は筆者による)

バードは収集家が買い求めるような高価な品だけでなく、農民が使う日用品も形・色・全体的な効果の点で申し分ないと感心している。1878年5月21日に横浜に上陸して以来、東京から日光、東北地方を縦断して北海道に至ったバードは、欧米からの旅行者が目にする事のなかった農村の暮らしもつぶさに見てきた。日本滞在の後半は東京に戻って横浜から船で神戸に移動し、関西一円を旅した。バードが京都の街中で目にする品々に魅了され、その飾り立てない簡素な美の特質を指摘するのは、京都に来るまでに、イギリスで目にする日本製品と日本国内で使用されている製品との違いが分かる目を養っていたからであろう。すでに旅のはじめに訪れた日光の旅館で、その畳の清潔さ、床の間に活けてあるただ一輪の花の効果に感心していることからして、また次の記述からも、イギリスで流行している日本製品のけばけばしさに違和感を覚えていたと推測される。

Instead of the big birds and trees and great blotchy clouds in gold paint, which disfigure lacquer made for the English market, true Kiyôto lacquer, made for those who love it, is adorned mainly with suggested sprays of the most feathery species of bamboo, or an indication of the foliage of a pine, or a moon and light clouds, all on a ground of golden mist. (Vol. 2, 248)

バードは京都の店々に並ぶ美しい工芸品の多さに圧倒され (“The hundreds of shops in Kiyôto, in which numbers of beautiful objects are carefully arranged, are bewildering” Vol. 2, 249)、京都の職人の技をイギリスの職人と比較して高く評価しているが、一方で輸出品を作る工房の製品を批判している。

An English workman who “scamps” his work, and turns out a piece of original vulgarity, or a badly executed imitation of a real work of art, should see what honest, careful, loving labour does here in perfection of finish for one shilling a day. It is true that work at which a Japanese would hardly look passes muster with foreigners. I went with Mr. Noguchi to-day to the Awata pottery, where 200 men are employed in making a cream-coloured, crackled ware for exportation, and there wasted two and a half hours in buying a tea-service, not only because tea and the *tabaco bon* were introduced so often, but

because, being made for the English market, nearly all the cups were crowded with gaudy butterflies, and there was scarcely a cup or saucer that was perfectly circular. (Vol. 2, 249)

バードは「ぞんざいなやつつけ仕事で俗悪な独自品を作るか、芸術作品の下手な模倣品を作るかしているイギリスの職人に、京都の職人の仕事を見せたいものだ」と言う。ここでバードが用いる“honest, careful, loving labour”という表現には後ほど改めて注目したい。その一方でバードは、日本人なら目もくれないような品が外国人には受け入れられていることも指摘する。野口の案内で訪れた粟田焼の工房で、イギリス向けに製造された紅茶セットが、どれも同じようなければしい絵付けをされた粗造品ばかりで失望している。

バードが見た京都の工芸品は、主力輸出品としてイギリス社会にも浸透していた。しかし職人の技から大量生産へと移行し、欧米人に迎合する意匠ばかりになるにつれ、その評価は下がっていくことがバードの指摘からも読み取れる。先に触れた京薩摩のブームが短かったことの原因がここにも見られる。京薩摩の品質の低下については、親日家で日本在住期間も長いアメリカ人 Eliza Ruhamah Scidmore (1856-1928) の *Jinrikisha Days in Japan* (初版 1891) にも言及がある。以下は粟田焼の工房を巡った感想である。

At the other houses faience [= 粟田焼], in an infinity of new and strange designs and extraordinary colors is seen, each less and less Japanese. All these Awata potters work almost entirely for the foreign market, and their novelties are not disclosed to the visitor, nor sold in Japan, until they have had their vogue in the New York and London markets. From those foreign centres come instructions as to shapes, colors, and designs likely to prove popular for another season, and the ceramic artists abjectly follow these foreign models. (279) ([]は筆者による)

粟田焼がまるで現代のファッション業界のように、ニューヨークやロンドンの新シーズンの流行に合わせて量産されている様子が分かる。そこでは職人たちは自らの創造精神を発揮することもなく、「卑屈に」(abjectly)、つまりただ欧米の好みに合わせて命じられるデザインを黙々と絵付けしているにすぎない。

バードに話を戻そう。パークス公使から日本政府外務省への要請で、バードは日本国内を自由に移動できる外交官相当の「外国人旅行免状」を得ていた(金坂 第1巻 300-302、訳注(19)-(22))。金坂氏が指摘するように「開国して間もない新生日本のありようを、風景から住民の生活・考え方に至るまで鋭い観察眼と臨場感あふれる文章で鮮やかに描きだすバードが伝えてくれることは、パークスにとっても本国大英帝国にとっても得難い価値を有することだったのである。と同時に、日本政府にとっても案外関心のある旅だったと推察される」(金坂 第1巻 302、訳注(22))。バードの旅行記中、彼女の日本旅行が単なる個人旅行ではなく視察という意味合いを帯び

る局面が頻出するのはこのような理由による。京都でもバードは京都府によるもてなしを受けた。バードは京都に着いたら独りで *yadoya* に泊まるつもりだったのだが、できたばかりの同志社女学校のある Nijōsan Yashiki (公家の二条家の屋敷であった建物、金坂 第4巻、訳注 281(3)) に滞在する手筈が整っており、“seeing a great many of the sights with my hostess, and others with Mr. Noguchi, an English-speaking Japanese, deputed by the Governor to act as my *cicerone*” (Vol. 2, 224-225) という記述から、京都府知事が野口を案内人として差し向けたことが分かる。先の引用中にも登場する Mr. Noguchi とは、イギリス留学経験があり、西陣織復興のために京都府の勸業課に入って指導をしていた野口富蔵のことであり、バードの京都での見学も京都府がお膳立てをしたことが推察される (金坂 第4巻、282 訳注 (7)(8)、303 訳注 (6))。府としては大量生産方式の粟田焼の工房を京都が誇る施設としてバードに見学させたのだろうが、近代化の成果を示す意図があったとすれば、その意図は裏切られたことになる。バードが京都の工芸で評価したのは、“honest, careful, loving labour”、すなわちものづくりへの「誠実と細心と愛情」であった。粟田焼の工房にはそれが見出せなかったのである。同様にシドモアも職工たちが独自に美を追求することをやめ、外国人の好みに合わせて “objectly follow the foreign models” という仕事ぶりに、かつて欧米人が感嘆した職人芸をもう見出せなかった。

(3) Rudyard Kipling の場合

1907年にノーベル文学賞を受賞した作家 Rudyard Kipling (1865-1936) は、当時イギリスの植民地であったインドに生まれ、5歳半からイギリスで教育を受けた後、インドに戻って現地の新聞社に記者として勤めた。キプリングがはじめて来日したのは1889年、23歳の時であった。彼は東回りで各地を訪れながらイギリスに帰国するという旅行の報告を、インドで勤務していた *Pioneer* 紙に、旅先からの手紙という形式で寄稿した。それらの手紙は気儘な世界漫遊家としての自画像を演出し、若者らしい澁刺とした好奇心と軽妙さに満ちている。その筆致が以下の京都滞在時の文章にも表れている。京都で知恩院や、1864年に消失後、当時再建中の東本願寺を訪れ、建築のあらゆる箇所にかがえる石工、大工、金匠、画家の技と創意に感心しての感想である。

Verily Japan is a great people. Her masons play with stone, her carpenters with wood, her smiths with iron, and her artists with life, death, and all the eye can take in. Mercifully she has been denied the last touch of firmness in her character which would enable her to play with the whole round world. We possess that – we, the nation of the glass flower-shade, the pink worsted mat, the red and green china puppy dog, and the poisonous Brussels carpet. It is our compensation . . . (92)

日本の職人は楽しみながら仕事をしている、というのが旅行者たちの感想であった。建物の細部にも工芸品にも、そして仕事場でも手仕事への愛が感じられたのだ。日本人には世界を制覇する

性格の強さが無いことが幸いだ、イギリス人は世界を制覇する代償に、俗悪な趣味の製品に囲まれて生活する羽目になっている、というのがキプリングのひねった物言いだ、ここで彼も指摘するのが工業化によって大量に生産される製品の趣味の低下である。その代表としてイギリスの中流家庭を飾っている室内装飾品を列挙しているのだが、その最後に挙っている“the poisonous Brussels carpet”（不快極まりないブラッセル織カーペット）に、次に注目したい。

2 失われた手仕事の世界を求めて

キプリングの来日はバードの来日から11年後であり、京都の様子にも違いがある。ノースが1875年に京都を訪れた時、ヨーロッパ人は彼女を含め6人だったと書いたのは先に紹介したが、キプリングは「京都を訪れる外国人はほとんどいない」と保証されたのに、同じ船で長崎に着いた60人と京都のホテルで同宿する羽目になったことをほやいている。欧米人の旅行記に頻出するこの宿は、祇園円山の中腹にあった也阿弥ホテルである。バードが京都を訪れた翌年の1879年、外国人向けのホテルとして開業した。このホテルは和洋折衷の様式で、洋食を供した。このホテルのベランダから西に広がる京都の眺めを書き記している旅行者が多い。葦の海に例えられることもあった京都盆地の景観は、平屋あるいは二階建ての中から寺院の屋根が大きくそびえていた。それはシドモアの目に、昼間は畑の畦のように見え、夜は何千もの灯火の行列と見えた(223-224)。1893年に日本を訪れたオーストリア皇太子フランツ・フェルディナントは京都では御所に滞在したが、京都での最終日、也阿弥ホテルのベランダで市内を一望しながら、日本の過去と現在に想いを馳せた。その時、煙を吐き出す工場の煙突に目が釘付けになってしまい、「もはやこの国にも味気ないヨーロッパ文明の時代が開始されてしまったのだという感慨におそわれた」(137)と述懐する。ヨーロッパ文明の影響によって「古き良き日本」が失われることを嘆く声は他の旅行記も共有している。旅行者の多くが近代化以前の日本に対して抱く愛惜の情は、彼ら自身が失ったものへのノスタルジアと喪失感の表現でもあると、筆者は考える。そのノスタルジアと喪失感、いったいどこから生じるのか、次に考えてみたい。

(1) 畳の上のブラッセル織カーペット

バードが京都の職人の仕事をイギリスの職人の仕事と比較して“honest, careful, loving labour”と称えたこと、キプリングも京都で目にした職人技が生み出す美と対照させて、イギリスの大量生産品を俗悪と評したのは先に見た通りである。いずれもヨーロッパの室内装飾の趣味が日本を浸食し、職人の手仕事を衰退させるという危機感を抱いた。その欧米からの悪影響の代表と見なされているのが、先に見たようにけばけばしい装飾を施された輸出用栗田焼と、ブラッセル織カーペットなのである。

バードは「安っぽくけばけばしい」(tawdry) ブラッセル織カーペットが日本家屋の簡素な美を台無しにしているとして目の敵にする。バードは東京で森有礼が自宅で開催したパーティに出

席した時の感想を次のように記す。

The house, a very simple and pretty Japanese building, is Europeanised by a tawdry Brussels carpet, black and gold lacquer chairs, and black and gold tables with books of Japanese pictures upon them. (Vol. 2, 203).

キプリングも同様にブラッセル織カーペットを目の敵にしている。彼は京都を訪れる前に大阪に滞在している。宿泊先はキプリングが“Juter's”と記し、「川の中州に建っている」と書いていることから、中之島に1881年新築開業した、大阪ホテルの前身である自由亭であると推測される。キプリングはそのホテルの和洋折衷式の内装について、多少おどけながらも「ひどいものだ」と書く。

Here the views of our civilisation and a counterfeit collide and the result is awful. The building is altogether Japanese; wood and tile and sliding screen from top to bottom; but the fitments are mixed. My room, for instance, held a *tokonoma*, made of the polished black stem of a palm and delicate woodwork, framing a scroll picture representing in cool greys and whites storks in every attitude. There was also a fair screen fit for a lady's drawing-room. But on the floor over the white mats was stretched a Brussels carpet that made the indignant toes tingle. (71-72)

新しく清潔な畳を“white”と表現し愛するキプリングにとって、その上にわざわざ敷かれたブラッセル織カーペットは忌々しい異物でしかなかった。ヴィクトリア朝イギリスの室内にはやたらとたくさんの家具が置かれることが普通だったが、Peter Conrad はそれをヴィクトリア朝の人々の“sheer quantity, fullness, the *horror vacui*”（多量と充満〔への欲望〕と空白への恐怖）と呼んだ(98)。長崎に到着した直後から、それと対照的な日本の家屋に魅せられていたキプリングにとって、ブラッセル織カーペットはその美を損なうこと甚だしい代物であった。

日本の動物学・人類学・民俗学の発展に寄与したアメリカ人 Edward S. Morse (1838-1925) は日本を広く旅した。彼の日本滞在日記である *Japan Day by Day* (1917) には1877年と1882年の滞在時の見聞が綴られている。モースは1882年の7月末に京都を訪れた。也阿弥ホテルに滞在し、ステーキとコーヒーに満足している。也阿弥ホテルの内部や庭園は日本風だがサービスは欧米式であるところがモースからも高い評価を得ている。モースはホテルの内と外の至る所に優れた意匠を見出した後、「この国を旅する人を驚嘆させるのは、どんな辺鄙な寒村にでも、これらの仕事が十分できる腕を持つ、大工や指物師や意匠家がいることである」(258)と、日本の至る所に手仕事の美が息づいていることに賛嘆の声を挙げています。これはバードが見出した“honest, careful, loving labour”の産物としての工芸に通じる。モースは続けて次のように述懐する。

The city of Kyoto is certainly the artistic centre of artistic Japan. Everywhere you see evidences of it—in the shops, houses, fences, roof-tops, window-openings, sliding screens and the devices for sliding them, trellises, balcony rails. The very advertisements are designed with taste—art and refinement are everywhere. (258-259)

このようにモースは、京都の町全体が日本の手仕事の美と技の洗練を表す芸術的日本の中心であると認める。またモースは日本の住まいに多大な関心を示して、詳しく調査した結果を *Japanese Homes and Their Surroundings* にまとめた。モース自身のスケッチも多数掲載されている。そこには一般家庭を含む日本の住まいにおける工夫や職人の仕事への敬愛が感じられるが、彼は城や大名屋敷が地方行政の庁舎として使用されて、もとあった調和を損ねていると嘆いている (“the introduction of varnished furniture and gaudy-colored foreign carpets in some of the apartments has brought sad discord into the former harmonies of the place.” (319))。モースの記述から、明治時代に城や大名屋敷が壊されなかった場合も、文化財として元の機能を保存するのではなく、官庁等として使用されることが多かったが、その場合には洋式の家具と「けばけばしい色の外国製カーペット」がつきものだったことが分かる。

シドモアも城がそのように利用された場所で目にした「ぞっとするブラッセル織カーペット」を槍玉に挙げる。二条城を見学したシドモアは、室内の至る所に見られる装飾芸術に感嘆する。しかし同時に畳の上にはブラッセル織カーペットが敷かれ、テーブルとそれを囲む椅子が並べられているのを見て嘆き、同様の洋風化が京都府の庁舎や店舗、茶屋にも見られるようになっていくことも指摘する。引用は1900年版から行ったが、改訂版が出るのは1902年であり、以下の引用部分も1891年の初版の記述と同じと考えられる。

But, alas! A hideous Brussels carpet, a round, centre-table, and a ring of straight-backed chairs have crowded their vulgar way into these stately rooms, as into every government building and office, large shop, and tea-house in Kioto. (249)

シドモアが二条城を見学したのは1891年以前と考えられるが、二条城には1871年に府庁が置かれ、のち一時、陸軍省が使用した。一般公開を始めたのは1940年になってからである。外崎氏の年譜によればシドモアの初来日は1884年のことと推測される(外崎 468-469)。彼女が二条城を見学した当時の使用状況は不明だが、彼女が “the two splendid audience-chambers” (謁見室) と呼び、「床の間の前に広い “dais” (台座) が付いている」と描写していることから、彼女がブラッセル織カーペットを見たのはおそらくは二の丸御殿の大広間と黒書院ではないか。だとすれば、そこにカーペットとテーブルセットを並べるのは、なるほど嘆かわしく思われただろう。現在の文化財としての見方とはかなり異なる扱いがされていたと考えられる。

これほどまでに欧米人が顔をしかめるブラッセル織カーペットとはいったいどのようなものなのか。“Brussels carpet”とは、その名が示すベルギーのブリュッセルではなく、19世紀のイギリスやアメリカで大量生産されるようになった機械織りのループパイル・カーペットのことである。1928-30年出版の絵や写真付き百科事典 *I See All* によれば “A machine-made carpet with pile of looped worsted threads on a linen and cotton base” と説明され、掲載写真は幾何学模様化した花の図柄のカーペットである (Vol.1, 337)。機械織りであるため、比較的安価にカーペットという贅沢品が手に入るようになり、イギリスの中流家庭から暮らし向きのよい労働者の家庭まで普及していったと考えられる。ボストン近郊に拠点を持つヴィクトリア朝様式の内装を扱う J. R. Burrows 社作成の「イギリスのカーペットの歴史」解説によれば、“By the mid-nineteenth century it became common to make the best showing with a Wilton carpet in the best parlor or drawing room, and to use the less expensive Brussels carpet in the lesser rooms of a dwelling.” とあるように、ブラッセル織カーペットは19世紀半ばには高級品でなくなっていた。日本では明治時代に、まず洋式を取り入れた建物で使用されるようになったと推測される。この点について日本カーペット工業組合は以下のように解説している。

明治以降洋風建築の増加にともない、西欧風の機械織りパイル敷物の需要が出てきました。この敷物がウィルトン、タペストリー、アキスミンスター等のカーペットであり、明治より大正にかけて輸入されたこれらの外国製のカーペットは「じゅうたん」という名で呼ばれました。中国語の「ティータン」がその名の由来と言われています。

わが国では明治22年(1889年)、欧米のインテリア敷物を収集していた高島屋4代の飯田新七がウェルトン織^{ママ}、ブラッセル織などのカーペットの試織を大阪・住吉の村田に命じました。その後村田は明治36年(1903年)に5色のウィルトン織を手織りで織り始め、大阪府下の手織業者で機械生産をはじめものが相次ぎました。

京都の高島屋四代の飯田新七が欧米の敷物を入手した経路は筆者には不明であるが、『高島屋百年史』によれば、四代新七は海外の状況を把握する必要を感じ、1889年のパリ万博開催に合わせて、フランス・ドイツ・スイス・イギリス・アメリカへの視察旅行を行った(大江 50)ということなので、おそらくこの旅行中に入手したのも多かったのではないかと推測される。日本カーペット工業組合の解説にあるように、四代新七が国内での試織を始めたのが1889年だとすれば、帰国後すぐに日本でも同様のものを作れるように行動に移したことになる。上述のバード・モース・シドモア・キプリングが日本を訪れたのはそれ以前か同時期なので、彼らが目にしたのは輸入品だったと考えられる。引用文中の「タピストリー」カーペットについては、日本カーペット工業組合作成の年表によれば、1833年に「英国エジンバラのリチャード・ワイトック パイル糸に捺染した『タピストリー・カーペット』を発明」とある。これもバードが「本来なら趣味の良い日本人が犯す誤り」のひとつとして挙げている。

It is singular that the Japanese, who rarely commit a solecism in taste in their national costume, architecture, or decorative art, seem to be perfectly destitute of perception when they borrow ours. Their tasteless, Americanised structures, and the “loud,” gaudy, “tapestry” carpets which they lay down on the floors of their public buildings when they relinquish their own beautiful mats, are instances in point. (Vol. 2, 187-188)

ここでも公共の建物に用いられているカーペットのけばけばしさが日本文化にそぐわないものの代表に挙げられている。

ただしイギリスとアメリカからの旅行者が日本でブラッセル織カーペットやタピストリー・カーペットを見て示す拒絶反応には、ただその色が日本家屋には派手すぎるという以上の理由があるのではないかと考えられるので、ここでその理由について考察を試みたい。

(2) 万国博覧会の葛藤

機械織りのカーペットは1851年にロンドンで開催された第1回万国博覧会に出品された。この博覧会は大英帝国の威容を国内外に示す一大イベントとして、国を挙げて取り組み大成功をおさめた。その陰で今日では目立たないが、当時のイギリスの言論界では、産業革命の成果である工業製品に対して賛否両論がかまびすしく行き交っていた。一方では技術革新のおかげで大衆にも手が届くようになった家具調度や室内装飾の美しさに賛嘆の声があがった。画家のHenrietta Ward(1832-1924)は第1回万国博覧会で見た「美しい手織りや機械織りのカーペット」に憧れた。彼女の回想をAuerbachの*The Great Exhibition of 1851*から引用する。

[Henrietta Ward] wrote in her autobiography that ‘The exhibition revolutionized the home surroundings of the people. Tasteful table decorations, flower-decked tables, and light and elegant silver succeeded the cumbersome plate of the Georgian period.’ She remembered lovely hand- and machine-made carpets, and recalled mosaic table tops and pottery ‘which roused a feeling for envious possession.’ (117) ([]は筆者による)

家具調度や食器具が重々しいデザインから軽快で優美なデザインに変化して、博覧会を訪れた人々の購買欲を誘った。多くの人々にとってそれらが機械で作られているのが職人の技の結晶であろうが、素敵に見えればどうでもよかった。だが他方で、博覧会で称揚された機械化は職人からものづくりの喜びを奪うものであり、そうやって製造された製品に美はないという主張もあった。その筆頭がJohn Ruskin(1819-1900)であり、彼にとって重要な問いかけは、その家具や調度の製作には手仕事の喜びが伴っていたか、というものであった。シドモアが栗田焼の職工たちに見出したような“abject”な姿勢に対して、ラスキンが称揚するのは、バードが京都の

職人の手仕事に見出したような“honest, careful, loving labour”であった。この精神は William Morris(1834-1896) の the Arts and Crafts Movement において実践される (Auerbach, 118)。博覧会はかように相対する思想の磁場となった。

(3) 「理想の中世」としての日本

ラスキンとモリスにとっての理想はイギリス中世の手仕事の世界であった。モリスは『ユートピア便り』(*News from Nowhere*, 1891) というユートピア小説に、ロンドンの200年後の姿を描いているが、そこでは人々は、美しい手織りの布で作った、ゆったりとした中世風の衣服を着て楽しげに生活している。職人たちはものづくりに喜びを感じながら、のびのびと仕事している。中世を理想とすることは、より良き未来への進歩を標榜する博覧会の思想とは対照的な、過去の時代への逆行にも聞こえる。しかしモリスは敢えて中世の世界を、流血の革命を経て到達する未来の理想世界として描き出す。キプリングは、モリスらとともにラファエロ前派の一員として活動した Edward Burne-Jones(1833-1898) を叔父に持ち、モリスを身近に知っていた (Kipling, 107, Note 12)。粟田焼の工房を訪れたキプリングは、モリスらの活動に言及して、彼らは職人の手仕事の世界に関しては日本にこそ範を取るべきだと書く。

Somewhere in dirty England men dream of craftsmen working under conditions which shall help and not stifle the half-formed thought. [...] Would they have their dream realised, let them see how they make pottery in Japan [...] The Barbarians want Satsuma and they shall have it, if it has to be made in Kyoto one piece per twenty minutes. So much for the baser forms of the craft. (102)

「薩摩をほしがる野蛮人」とはイギリス人のことである。当時のイギリスでは工業化による大気汚染、工場労働者の置かれた劣悪な環境が長らく問題となっていた。日本に来たイギリス人の多くは空気の清浄さ、人々の笑顔、労働への真摯な態度に瞠目している。彼らは日本の地に、まさにモリスたちが夢想した中世的世界が息づいているのを目の当たりにしたのである。

イギリス人の多くが、モリスの中世的世界を理想の未来としてその実現を目指していたとは考えられない。しかし来日したイギリス人の多くが日本の社会に一種のノスタルジアを感じている。彼らは当時の日本に単なる「異文化」を見出しただけではない。かつてのイギリスにもあり、そして今では失われた世界をも見出したと考えられるのではないか。故国で資本主義と産業革命によってその世界が急速に失われていったことをひしひしと感じる彼らが、急速な近代化を押し進める当時の日本に対して示す苛立ちと愛惜の情は、彼ら自身の喪失感の投影でもあるのだ。

3 まとめと今後の展開

以上、明治時代の京都を訪れたイギリス人の例としてノース・バード・キプリングを取り上げ、彼らの経験を補足するためアメリカ人の例としてシドモア・モースを取り上げた。彼らが京都で目にした美術工芸や住まいに見出した職人の技への反応を考察し、特に欧米向けの大量生産に対応していった粟田焼に注目した。また日本家屋の簡素な上品さの対照として、日本の美を損なう代表と見なされたブラッセル織カーペットを取り上げた。そして彼らの反応の背後に、故国では失われた職人の手仕事の世界へのノスタルジアと喪失感があることを指摘した。

本稿で取り上げたブラッセル織カーペットについては、幾つか疑問が残る。

- 1) ブラッセル織カーペットはどこから来たのか。イギリスあるいはアメリカと考えるのが妥当だが、現在のところ筆者には不明である。『明治以降京都貿易史』には、京都が主に輸出に注力した歴史が紹介されているが、輸入品に関しては他の資料に当たる必要がある。
- 2) シドモアも指摘するようにブラッセル織カーペットが急速に普及していったとすれば、なぜそのように広まったのか。またそれは流行と呼んでよいものだったのか。
- 3) 当時、イギリスとアメリカでは機械生産が盛んになって、もはや高級品ではなくなっていたこの種のカーペットが、なぜ二条城の格式高い部屋に敷かれたのか。日本では高級品扱いだったのか。

これらは当時の貿易産業と美意識に関わる問題であり、今後も引き続き調査する必要がある。

美意識の問題についても疑問が残るが、そのひとつが、京都を訪れた欧米人が利用した也阿弥ホテルへの反応である。日本の住まいの意匠に魅了されたモースは、也阿弥ホテルにも職人の手仕事の美を見出している。キプリングがこのホテルに用いた“the quaintest hotel that ever you saw” (83) という表現には否定的なニュアンスはない。むしろ「風変わりで古めかしい趣がある」という評価である。本稿で扱った欧米人は一様に也阿弥ホテルに満足している。フォークとナイフで洋食を食べることができたこのホテルは、写真を見れば和洋折衷式のように見える（白幡 56-57）。白幡氏によれば、

各部屋のドアがなく、カーテンで仕切った四十室があったという。（中略）建物の構造も、たしかに和風ではあるが、子細に見ると開口部が多く、しかも窓ガラスがはめられており、光を十分に採り入れることができる明るい建築である。さらに周囲をベランダが取り巻いており、そこには椅子が置かれている。幕末、明治にアジア諸国の開港場で西洋人が建てた、いわゆるコロニアルスタイルの建物といってよい。

也阿弥ホテルは明治三十二年に焼失。三十五年に再建され営業を続けたが、再び明治三十九年に火事を出して焼失。その歴史を閉じた。(56)

キプリングが滞在した大阪の自由亭の客室にあった畳の上のブラッセル織カーペットは、バード

が“a solecism in taste”と呼ぶ美意識上の誤りの典型として扱われている。このブラッセル織カーペットに代表される日本の近代化に拒絶反応を示した彼らが居心地よく感じた也阿弥ホテルとは、どのような空間とサービスを提供したのか、引き続き調べたい。上の引用から、也阿弥ホテルが営業したのは1879-1899年と1902-1906年ということになる。当初の建物がどのようなものだったのか、再建後どのように変わったのかも興味深い。他の旅行記の記述からも、也阿弥ホテルの評価とその背後にある美意識を追ってきたい。

本研究報告は、平成25年度から3年計画で進めている「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」の一部であり、本稿では主にイギリス人旅行者の、京都の工芸品と室内装飾に対する反応と、彼らの評価の背後にある美意識について考察した。今後は引き続き、美意識の問題に関連した京都の伝統文化と近代化へのまなざし、京都の産業へのまなざしについて研究するとともに、京都の景観へのまなざしへと研究を広げていく予定である。

[付記] 本稿をまとめるにあたっては、明治時代の京都の貿易と高島屋の歴史に関して京都府立総合資料館文献課の松田万智子氏からご教示をいただいたことを感謝します。

本稿は、平成25年度科学研究費基盤研究(C)「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」(課題番号25511007 研究代表者:野口祐子)の成果の一部として発表するものである。

[引用文献]

大江善三編『高島屋百年史』高島屋本店、1941。

金坂清則「訳注」イザベラ・バード『完訳 日本奥地紀行』第1巻～第4巻、金坂清則訳注、平凡社、2012-2013。

清水三年坂美術館「京薩摩」展チラシ解説。2012。

白幡洋三郎『幕末・維新 彩色の京都』京都新聞社編、京都新聞出版センター、2004。

外崎克久「年譜」『シドモア日本紀行 明治の人力車ツアー』外崎克久訳、講談社学術文庫、2002。

フェルディナント、フランツ『オーストリア皇太子の日本日記—明治二十六年夏の記録』安藤勉訳、講談社学術文庫、2005。

松野文造編『明治以降京都貿易史』京都貿易協会、1905。

Auerbach, Jeffrey A. *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*. New Haven: Yale UP, 1999.

Bird, Isabella Lucy. *Unbeaten Tracks in Japan*, Vol. 2. 1880. Cambridge: Cambridge UP, 2010. Digitally reprinted.

Chamberlain, Basil Hall. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with*

- Japan, for the Use of Travellers and Others*. 1898. Digitised Historical Collection from the British Library.
- Conrad, Peter. *The Victorian Treasure-House*. London: Collins, 1973.
- Kipling, Rudyard. *Kipling's Japan: Collected Writings*. Eds. Hugh Cortazzi & George Webb. London: The Athlone Press, 1988.
- Mee, Arthur, ed. *I See All: The World's First Picture Encyclopedia with 100,000 Pictures of People, Places, and Things and an Atlas of Every Country in the World*. London: The Amalgamated Press, 1928-30. アイ・シー・オール刊行会、復刻版、1968.
- Morris, William. *News from Nowhere and Other Writings*. Ed. Clive Wilmer. London: Penguin Books, 1993.
- Morse, Edward S. *Japanese Homes and Their Surroundings*. New York: Harper & Brothers, 1885. BiblioLife, LLC. Digitally reprinted.
- , *Japan Day by Day*, Vol. II. Boston & New York: Houghton Mifflin, 1917. Internet Archive, Full text of "Japan Day by Day, 1877, 1878-79, 1882-83, with 777 Illustrations from Sketches in the Author's Journal, Vol. II."
<https://ia700400.us.archive.org/31/items/japandaybyday18702morsuoft/japandaybyday18702morsuoft.pdf>
- North, Marianne. Ed. Janet Symonds. *Recollections of a Happy Life: Being the Autobiography of Marianne North*, Vol. 1. 1892. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Digitally reprinted.
- Scidmore, Eliza Ruhamah. *Jinrikisha Days in Japan*. New York: Harper, 1900. Kessinger Publishing, 2010. Digitally reprinted.
- Ward, Henrietta M. A. *Memories of Ninety Years*. Ed. Isabel G. McAllister. London: Hutchinson & Co., 1924, 64-65, 67. Quoted in Auerbach (1999).
- J. R. Burrows & Company, "A Brief History of English Carpets, and the Stourvale Mill" <http://www.burrows.com/hist.html> (2013年9月30日 11:14 現在)
- 「自由亭」 <https://sites.google.com/site/tsaaarc/osakahotel> (2013年9月20日 13:35 現在)
- 「並河靖之の年譜」並河靖之七宝記念館 <http://www8.plala.or.jp/nayspo/yasuyuki.html> (2013年9月18日 12:30 現在)
- 「日本カーペット工業組合／歴史・種類・製法」 <http://www.carpet.or.jp/re.htm> (2013年9月25日 9:58 現在)

(2013年10月1日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部欧米言語文化学科教授)